2026.11.5

仏教通信「砂漠を越えた感謝の教え」１１月

人気ドラマ『VIVANT』シーズン１において、主人公の乃木ら4人が架空の「アド砂漠」を横断し、バルカ共和国(これも架空の国)から脱出する過酷なシーンが描かれていました。このロケ地となったのは、モンゴル南部のゴビ砂漠にある「ホンゴル砂丘」と言われています。ゴビ砂漠といえば、『西遊記』のモデルにもなった7世紀の中国・唐の僧侶・玄奘三蔵の過酷な旅を思い起こさせます。彼が国の禁止令を破り、命がけでこの砂漠を越えてインド(天竺)へ向かった最大の理由は、「正しい仏教経典」を求めるためでした。

当時の中国にはすでに漢訳された経典が存在していましたが、誤訳や解釈の食い違いが多くありました。そこで玄奘は、「サンスクリット語(インド古代語)の原典から直接学び、正しい教えを持ち帰る」という強い決意を抱き、鎖国状態だった祖国を旅立ったのです。彼がインドから持ち帰り、正確な漢訳を施した経典は、日本の仏教文化にも大きな影響を与え、現在も日本で広く親しまれている『般若心経』も彼が漢訳したものの一つです。

このように、はるか遠くインドから命がけで運ばれた教えは、海を渡り日本へと受け継がれていきました。こうした「受け継がれた教えに出遇えたことへの感謝」を改めて味わう機会が、11月13日に行われる「報恩講」という仏教行事です。報恩講は、浄土真宗の宗祖である親鸞聖人のご命日を縁として勤められますが、親鸞聖人が生涯をかけて明らかにしたその教えもまた、玄奘三蔵のような先人たちが果てしない砂漠を越え、経典を伝えてくれた苦難の歴史の上に成り立っています。

ドラマの中で描かれた過酷な砂漠の光景は、かつて先人たちが歩んだ途方もない道のりを思い起こさせてくれました。その歴史に思いを馳せながら報恩講に参拝すると、はるかな時間と距離を越えて、今自分のもとにまで届けられたお釈迦様の教えの有難さがより一層深く感じられるのではないでしょうか。フランス語の「VIVANT」には「生きる」という意味があります。私たちが仏前で静かに手を合わせるその穏やかな瞬間もまた、はるか昔の先人たちが身を賭して思いをつないでくれた「いのちのドラマ」の続きと言えるのかもしれません。合掌



小学部 報恩講は**１１月１３日(金)１限目**に行われます。

小学部礼拝委員会